

平成 21 年 5 月 15 日現在

研究種目： 基盤研究（C）
 研究期間：2007～2008
 課題番号： 19520170
 研究課題名（和文） 近代文学に描かれた「風景表象」の精神史的研究
 研究課題名（英文） A Research on Mental History of “Description of Landscape” in Modern Japanese Literature

研究代表者

中島 国彦（NAKAJIMA, Kunihiko）
 早稲田大学・文学大学院・教授
 研究者番号：00063785

研究成果の概要：

日本近代の文学と美術との相関に留意しながら、文学作品に描かれた自然や都市、さまざまな風景を「風景表象」としてとらえ、その近代における変遷、いくつかの典型的な事例における特色を分析し、ひいてはそうした見方を支える精神のありかたを歴史的に明らかにした。あわせて、風景を描く文体、表現の特色をも考察した。中でも、明治中期の都市貧民窟を描いた松原岩五郎、小諸の自然を描いた島崎藤村、明治大正の東京を描いた永井荷風などの作品については、詳細な分析を加えて、論文・著書のかたちで公表した。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	600,000	180,000	780,000
2008 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,100,000	330,000	1,430,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：日本近代文学・風景表象・自然描写・都市表象・松原岩五郎・夏目漱石・島崎藤村・永井荷風

1. 研究開始当初の背景

（1）日本の近代文学と美術との相関は、以前から言われ、いくつかの達成が見られるが、まだ概念的な指摘にとどまっており、扱われる文学者も限られたものであった。そうした現状にあって、早くからその重要性に着目してきた一人として、その体系化を試みるべく、努力を重ねてきた。学位論文『近代文学にみる感受性』（1994、筑摩書房）は、その一端を示したものである。

（2）平成 17・18 年度の科学研究費補助金（基盤研究 C・課題番号 17520129）を受けること

で、更なる研究の展開をはかった。「文学と美術の相関からみた「風景表象」の体系的な研究」という題目で、これまで論じてこなかった文学者を扱い、重要な文学者においてはより深く分析した。その際、新たに「風景表象」という概念を定立して、体系性を明らかにした。「風景表象」とは、単なる自然の風物でなく、例えば都市の風景、目に見える視野に入ってくる何気ない光景まで含む、多元的な概念である。

（3）平成 17・18 年度の科学研究費補助金の成果として、学術論文をいくつか発表したが、

そこで扱われたのは、堀辰雄・水野葉舟・柳田国男・梶井基次郎などの文学者で、「闇」を用いた新たな文学史の構想なども試みた。

2. 研究の目的

(1) 平成 17・18 年度以来の本研究の基本的目的は、明治・大正・昭和の文学の流れを絶えず美術との相関で考え、その相関が近代という時代性と関わっていること、その相関から各文学者・芸術家の営為が深く浮かび上がって来ることを論じ、新たな近代文学像を確立することにある。更に、風景概念を定立し、その文化史・思想史的意味を考察することにある。

(2) 平成 17・18 年度の成果の延長として、新たな構想で平成 19・20 年度に臨んだが、その際、近年の「風景論」「空間論」「都市論」「自然論」の成果を踏まえて、次の 3 点に目的を設定した。

研究対象を従来扱った文学者以外にも拡大して、体系化をはかる。

「風景」概念を、哲学的・美学的にも明らかにするため、諸分野の概念を取り込み、その多元性を明らかにする。

近代の芸術家の「精神史」という概念を導入し、それを文学表現、言語表現を通して明らかにできるような方法を見つけ出す。

3. 研究の方法

(1) 「風景表象」の典型的な例を、より豊富に収集し、具体的に分析を加える。その時、なるべく明治・大正・昭和三代に広げられるように文学者を選択する。今回選んだのが、

松原岩五郎『最暗黒の東京』 明治の貧民窟ルポルタージュ

島崎藤村『千曲川のスケッチ』 信州の自然を描く

永井荷風『日和下駄』 東京という都市の文学形象

梶井基次郎の短編 伊豆の自然と「闇」の形象

水野葉舟の小品 印旛沼の文学形象
といった諸作品・テーマで、いずれもこれまでの作品選択の延長で、新たな展開に必須の作品・テーマである。それぞれを丹念に分析、その意味を明らかにする。

2 文体からみた「風景表象」の流れを明らかにする。「風景表象」の特質を明らかにするためには、それぞれの時代の典型的な文体・典型表現が見られるので、それを抽出し分析する。明治時代初期には、「奇」という表現が多く見られるように、時代と表現は密接に関係しているからである。

(3) 海外の「風景」に関する概念・理論を収集、検討し、研究に資するようにする。あわせて、日本の近代の思想文献において、「自然」「風景」がどう扱われてきたかをたどる

こととする。

4. 研究成果

(1) 研究成果の一端は、日常の授業の中にも生かされている。たとえば以下の通りである。

大学院文学研究科「比較文学」(修士課程) 文学部「近代の文学と文化」(1~4年) いずれも、論文化する前、あるいは論文化したものを講義する形で実施した。

(2) 学会発表による成果公表

今回試みたのは、鎌倉漱石の会例会での研究発表である。修善寺の大患以降の後期の漱石が描く「風景表象」を取り上げ、『思ひ出す事など』における自然描写が、空と雲に限られていることを出発点に、その後の『明暗』に至る展開として分析した。論文化の予定だが、発表は 2009 年秋になる。

(3) 学術論文・著書による発表

松原岩五郎『最暗黒の東京』注釈研究

これまで詳細な研究がなかった当該作品について、初めて抄出ながら本格的な注釈を試みたもの。『新日本古典文学大系明治編 30 明治名作集』に収録した。複雑な形成過程をたどり、明治 20 年代の中でこの作品がどう位置づけられるかを明らかにした。東京の貧民窟は都市風景にあって、特異なものだが、文学史にこれまで、多くは取り上げられてきていなかった。添えられている挿画も特色があり、その視線・対象の選択・単行本時の書き直しなど、いろいろと問題にすべきことが多い。単行本に添えた「解説『最暗黒の東京』の評価軸」では、岩五郎の「俯瞰」の視線に、時代と文学者の個性の問題点が多くあることを、指摘した。

島崎藤村『千曲川のスケッチ』研究

自然を描く典型的描写として『千曲川のスケッチ』を取り上げ、特にそこに見られる「秋」の自然描写の特色を論じた。「近代文学にみる「秋」の風景表象 島崎藤村『千曲川のスケッチ』を中心に」の題で論文化した。小諸時代の体験を踏まえ書かれた『千曲川のスケッチ』だが、よく調査してみると、1 年間の構成の中に、何年もの見聞・資料をうまく再構成し、凝縮した文体を生み出していることがわかる。明治初期の二葉亭四迷以来の「秋」の文学的形象の歴史の中でこの作をとらえることは、近代精神史、ひいては文学史・文体史の意味づけにおいて非常に大切である。それに向けての問題提起とした論文である。

永井荷風の東京への視線研究

アメリカ・フランス滞在を終えて帰国した永井荷風は、次第に東京に眼を向ける。荷風が東京生まれ、東京育ちであることも大切である。東京の「風景表象」が、そこ

から展開する。荷風がこだわったのが、日露戦後に急速に実施された、東京の改造である。時代の急転換、急成長時には、都市はどんどん改造され、懐かしい「風景表象」は失われていく。鋭い文明批評から江戸趣味に転換していく荷風の推移においては、失われつつある都市風景への愛惜が、顕著となろう。大正期を代表する随筆『日和下駄』は、そうした都会への荷風の眼が明らかにかがえる。しかし、『日和下駄』成立の過程には、考えなくてはならないことが多い。そうした点を考慮し、荷風の当時の新聞記事への関心を手がかりに、東京の何が、荷風の関心事であったかを明らかにし、『日和下駄』へ至る推移を丹念にたどることにした。「文学」所載論文は、そのまとまった成果である。

修善寺の大患以後の漱石研究

明治43年の所謂修善寺の大患以後、漱石の描く「風景表象」はどういうものであったのか。それを晩年まで辿ることで問題点を明らかにした。大患時には、寝たきりで、見える風景は空と雲のみである。異常な体験といわねばならない。そこで考えたのはどういうことか。『思ひ出す事など』のはそうした想念が、見事に描かれている。そこに描かれた風景の描写を検討し、さらに、病臥時に読んでいた書物の調査を進めて、漱石の心情の推移と、対応する風景の描写の変化を丹念に跡づけることとした。漱石が読んだ英語のロシア文学史が、そのままの形で訳されて、『思ひ出す事など』に吸収されていることを発見したのも、大きな成果の一つである。研究発表の形で報告は済んでいるが、ぜひ近いうちに論文のかたちで世に問いたいと考えている。

ヨーロッパ滞在時の有島武郎研究

アメリカから、船でイタリアに渡った有島武郎は、最初、ナポリに上陸する。弟有島生馬と連れ立って、イタリアを周遊するが、その初めの時期においては、ナポリの博物館見学の体験が、大きな問題を示している。有島がどういう美術品に関心を寄せたかを、のちの紀行文や、手紙から明らかにし、その西欧体験が有島に何をもちたかを論じた。軽井沢高原文庫の有島武郎展のために書いた論文であるが、風景を日本から外国にまで広げる体験で、多くの知見を得ることが出来たように思う。すでに論文の形で、成果をまとめた。

明治末の文学者における東京の風景

漱石・藤村・荷風などと違って、日露戦後、明治末に活動した文学者の営為を分析、そこに一つの時代性から来る特色を、指摘した。今回は、小川未明・石川啄木などと東京の関係を、短文にまとめて、しかるべきところに寄稿した。いずれも研究論文と

しては短めの枚数だが(10枚から20枚程度)これまで注意されてこなかったことを指摘し、反響もあった。小川未明がいつも借家を早稲田界隈に設定していること、その中で、ささやかな家庭生活を送っていることなどを具体的に指摘、従来の未明像に変換を迫る形になった。こうした小さなことでも論に関係するので、おろそかに出来ないことを説明した。

水野葉舟の印旛沼風景の発見

水野葉舟が印旛沼を訪れたのは明治末期であるが、その折書かれた小品文・紀行文には、不思議な文学性が感じられる。紀行文を通してその実態に迫り、葉舟が何を自然の中に発見し、作品の表現に生かしたかを考えた。2008年9月には、実際の印旛沼の踏査に出かけ、印旛沼・成田市などで多くの資料を収集した。このテーマについては、まだ論文化をしておらず、さらに踏査を経て、学術論文として発表したいと考えている。2007年には、日本近代文学館の資料を翻刻紹介する仕事を試みたが、2009年夏までには、その続篇を実現したいと考えている。

梶井基次郎の都市と自然の風景問題

梶井基次郎の描いた「風景表象」としては、三高時代の京都、一夏をすごした三重県松阪、上京後に訪れた伊豆の湯ヶ島などが思い浮かぶ。各地の具体的な場所を踏査し、たとえば2008年3月には京都を踏査、多くの材料を収集してきたが、まだ論文の形にしえていない。近い内に実現したいことの一つである。中でも、今のところとりわけ調査が進んでいるのが三重県松阪で、当時の梶井の日記を手がかりに、それに対する丹念な注付けの作業を通して、問題を明らかにしたいと思っている。

思想史における和辻哲郎の位置を考える

大正・昭和の時代に於ける、哲学者和辻哲郎の位置は、思った以上に大切なものとなっている。文学とも関係が深いし、大正時代には美術評も試みているからである。哲郎の、若き日の感想集を編集刊行する機会に恵まれ、その点にかんがみ、精神的な遍歴を跡づける試みをした。それは、精神的に「風景表象」を考える今回の視点の実践の一つとなったと思う。自己の感性と思想的思索をどうつなげるかという問題は、哲郎だけでなく、近代の多くの人物の課題であった。その点を明らかにしつつ、哲郎の書いた感想を丹念に辿ることで、時代の大きな展開を考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

- 中島国彦 都市美論への道 『日和下駄』
成立前夜 文学 10 巻 2 号 pp. 17 -
30 2009 査読無
- 中島国彦 逍遙と『早稲田文学』が目指
したもの 美濃加茂市民ミュージアム紀
要 8 集 pp. 1 - 13 2009 査読無
- 中島国彦 ナボリの有島武郎 ヨーロッ
パ体験の位相 高原文庫 23 号
pp.29 - 33 査読無
- 中島国彦 近代文学にみる「秋」の風景
表象 島崎藤村『千曲川のスケッチ』を
中心に 早稲田大学文学研究科紀要
(第三分冊) 53 輯 pp.3 - 14 2008
査読無

〔学会発表〕(計1件)

- 中島国彦 「自然」を見つめる心、「風
景」を描く言葉 『思ひ出す事など』を
出発点に 鎌倉漱石の会例会
2008・12・7 鎌倉帰源院

〔図書〕(計1件)

- 中島国彦 『新日本古典文学大系明治編
30 明治名作集』(「最暗黒の東京」の項)
岩波書店 pp.219 - 307、409 - 424、469
- 479 2009

〔その他・評論・解説〕(計4件)

- 中島国彦 野口富士男『わが荷風』の基
底 東京という場所への眼 野口富
士男文庫 10 号 pp. 4 - 5 2008
- 中島国彦 小川未明の東京風景 「東
京」が描くもの 「小川未明の東京
童話作家宣言まで 展」図録 pp. 10
- 11 2008
- 中島国彦 日本橋という名の「風景」
場所の想像力に触れて 『日本橋トボグ
ラフィ事典・本編』 たる出版 pp.
715-726 2007
- 中島国彦 ある知性の誕生 和辻哲郎
の出発 『偶像再興・面とペルソナ 和
辻哲郎感想集』 講談社文藝文庫 pp.
273 - 296 2007

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中島 国彦 (NAKAJIMA KUNIHICO)
早稲田大学・文学学術院・教授
研究者番号：00063785

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし